

## 研究、教育、そしてお菓子——思い出すままに

植村 秀樹

和田律子先生は一九九九年四月、流通情報学部助教として本学に着任された。時を同じくして、私は経済学部採用された。そして二年後、法学部の開設と同時に和田先生も私も法学部に移った。通算で二十年余にわたって同僚として過ごしてきたわけだが、和田先生が退職なさるまでの最後の四年間は、新松戸において研究室も隣り同士となるなど、なかなか浅からぬ縁に恵まれてきた。

われわれ一九九九年組は、ほぼ毎年、しばしば年に二回、「同期会」を開いている。年齢も経歴も専門も、したがって本学での担当科目も、何の共通点もない八人が、ただ、同じ年に本学に専任教員として着任したというだけの共通点でもって集まる会なのだが、共通点が少ないがゆえに一層、気のおけない楽しい集まりになっているのかもしれない。お酒を召し上がらない和田先生もほぼ皆勤といってよいほど、この会に参加しておられる。はじめのうちは仕事帰りに龍ヶ崎や柏で開くことが多かったが、その後、次第に退職される先生が

続いたこともあり、この十年余りは、八重洲、上野、根津などに河岸を変えて集まっている。店選びはもっぱら経済学部の飯野敏夫先生にお任せしているが、いつも仕事の疲れを癒すにもってこいの店を選んでくれる。和田先生の退職で、とうとう現役の教員は飯野先生と私だけになってしまったが、新型コロナウイルス感染症が収束すれば、また復活させたいものである。

さて、和田先生の専門である日本の古典文学といえ、私には苦い記憶しかない。「古文」は高校時代の私の最も苦手とする科目であり、何を読んでも（読まされても）文字通りちんぷんかんぷんであった。そんな私に衝撃を与えたのが和田先生の『藤原頼通の文化世界と更級日記』（新典社、二〇〇八年）である。日記文学の傑作のひとつに数えられる『更級日記』——名前ぐらいは私も知っていた——の解説や解釈のみならず、文学を生み、支えていた基盤を深く掘り下げ、文学研究と融合させたものである。

この浩瀚な研究書は和田先生の博士論文であり、長年にわたる研究の集大成である。それが上梓されて間もなくのこと、私が委員長を務めていた法学部学術研究委員会は早速、学内研究会を開くことを決め、この本を題材に和田先生のお話をうかがった。やはり、『更級日記』そのものというよりも、それを生んだ背景、つまり、藤原頼通が栄華を誇り、豊かな文学を生んだ時代とその〈文化世界〉が、先生の報告でもその後の質疑でも焦点となった。藤原氏の権勢を支えていた重要な柱が宮廷内の文化サロンであり、頼通の場合もやはりサロンのパトロンという文化的権威が政治的権威につながっており、『更級日記』もそうした土壌の上に咲いた花のひとつである。正確ではないかもしれないが、だいたいこういうことだったと思う。こういう話は、初めて耳にする——研究会の「予習」の段階で目にはしていた——ものであった。私は、この〈文化世界〉論を読みつつ聞いて、その面白さに引き込まれた。文学研究とは、作品そのものを読み解く、いかなればテキスト内の論理的解析と、その著者についての研究、つまり作品論と作家論の二本の柱からなるものとはばかり思ってい

た私にとって、和田先生の研究は、まったく新しい広い視座からの文学研究の世界を見せてくれるものであった。研究対象となる作品の背景をここまで深く掘り下げるのが今の古典文学研究なのかと感嘆した。助動詞の活用がどうしたこうしたの段階で瞬く間に落ちこぼれ、その後も宮廷文化なぞというものにはとんと興味を持たなかったのでもない私にも、こうした研究の新しさと面白さには関心を抱かないではいられなかった。

当日の研究会も盛会で、参加した先生方から多くの質問が寄せられた。参加者の大半が法律学や政治学の専門家であり、質問の大半は、和田先生にとっては頓珍漢なものだったに違いないが、それも含めて、専門科目担当者だけからなる学部と異なり、教養科目担当教員も学部配属されている幸運を感じられる充実した研究会であった。法学部ではこうした研究会を数多く催してきたが、その中でも私にとって最も知的刺激を受けたのがこの研究会である。研究会の終わりに近づいた頃だったのではないかと記憶しているが、十円玉（裏でなく表）でおなじみの平等院鳳凰堂の話になった。平等院の開基が頼通であり、大規模な調査に基づいた平等院全体の修復が行われているとお聞きした。修学旅行でもその後の旅行や出張でも宇治には行ったことのない私にとって平等院は長い間、美しくも不思議な建物にとどまっていた。工事が完了したらぜひ訪問したいと思っただ。そして、ほどなくそれは実現した。

二〇一五年三月、和田先生にご紹介いただいた平等院ミュージアム鳳翔館学芸員の太田亜希さんに案内をしてもらいながら、平等院を家族で見学（拝観）するという機会に恵まれた。太田さんの懇切丁寧な説明を聞きながら見て回ることで、国宝満載のみならず、ユネスコの世界遺産にも登録されている平等院を堪能することができた。一千年の時を超えて頼通の「文化世界」の一端に触れることができたかのような、実に得難い体験であった。鳳凰堂はそれ自体が国宝であるが、そこに鎮座まします定朝の手になる阿弥陀如来坐像の荘厳さに圧倒された。また、それを取り巻くさまざまな姿の五十二体の雲中供養菩薩像も実に見事なものである。これ

は勅斗雲に孫悟空でなく仏さまが——菩薩なので正しくは仏さまではないのだろうが、通俗的には——乗っているような木像である。こちらですべて国宝である。この他にも、いろいろと丁寧に案内してもらったのだが、悲しいことに、大半はすでに忘却の彼方へと去ってしまった。それでもその時の「満腹感」にも似た満足感は今もはっきりと覚えている。このような機会が得られたのも、和田先生のお口添えあればこそのことである。もちろん、だからといって、『更級日記』をはじめ古文が私にとってはちんぷんかんぷんであることには変わりはないのだが。ところで、平等院と和田先生との関係は浅からぬもののように、鳳翔館の紀要『鳳翔学叢』には、経済学部の高橋由紀先生らと共著で研究論文を連載なさっている。

『藤原頼通の文化世界と更級日記』はそれまでの研究の集大成であるが、それは終着点を意味しない。終章「新しい『更級日記』論にむけて」は、「今後も、〈頼通中心の文化世界〉の産物である諸ジャンルの諸作品との関連も含めて、『更級日記』研究を続けていきたいと考えている」と結ばれている。これで終わるのではなく、ここを新たな研究の出発点に、さらなる高みを目指すという宣言である。果たして和田先生は有言実行の人であった。頼通の〈文化世界〉を『大鏡』や『栄花物語』も含め多面的に捉えた久下裕利先生（昭和女子大学）との共編著『平安後期 頼通文化世界を考える——成熟の行方』（武蔵野書院、二〇一六年）として間もなく実を結んだ。

ところで、和田先生の研究成果は、こうした学術書や学術論文として発表されてきただけではない。本学での授業の他、公開講座などを通して、龍ヶ崎や松戸の市民にも惜しみなく提供されてきた。いわゆる社会教育である。龍ヶ崎での『源氏物語』を読む講座は好評のあまり「アンコール」の声鳴りやまず、熱心な市民の自主講座としてその後も長く続けられた。さらに先生は、上総の国府が置かれていた『更級日記』ゆかりの地、千葉県原市で開かれた市民講座にも招かれ、講演をなさっている。こうした活動の頂点といえるのが、退職

を間近に控えた二〇一九年秋に新松戸キャンパスの講堂で開催された公開講座「更級日記の世界——上総国（千葉県市原）から上洛千年紀」であろう。これを松戸市生涯学習推進課と本学との連携講座として、和田先生が高橋先生とともに企画された。上総での勤務を終えた菅原孝標が家族とともに市原を出立してちょうど千年を迎えようとしていた。そして『更級日記』はその出立から筆を起こしている。大きな節目を迎えようとしている時にこうした講座を企画することは、研究者にとってもまたとない幸運であろう。因みに『藤原頼通の文化世界と更級日記』を上梓された二〇〇八年は、著者である菅原孝標女の生誕千年にあたる年であった。偶然なのかもしれないが、そうした縁を引き寄せたのは偏に先生の研究に対する熱心さであろう。三回にわたったこの公開講座は、和田・高橋両先生が登壇したのみならず、横溝博先生（東北大学）、有馬義貴先生（奈良教育大学）、中村成里先生（明治大学）という最前線で活躍の研究者にお越しいただき、さらには市原市の関係者の方々の協力も得ての、贅の限りを尽くしたと言っても過言でないものとなった。先に述べたように研究室が隣り同士となったことで、和田先生と顔を合わせる機会が増えており、準備の様子などをお聞きすることがあった。「孝標女が市原を出立して千年の節目になるので、公開講座を企画している」とお話しされる先生の口ぶりから、この講座への先生の意気込みには並々ならぬものがあるとお見受けした。

最後の第三回に登壇された和田先生の演題は「物語作家への道——やっぱり私は物語が好き」というものであった。物語好きの少女が長じて自らの来し方を振り返って書いたのが『更級日記』のだが、その菅原孝標女の心情を簡潔に表す言葉が「やっぱり私は物語が好き」ということなのである。しかし、この「やっぱり私は物語が好き」というセリフは、孝標女の生涯と執筆の経緯などを語りながら、それにかこつけた和田先生ご自身の言葉であったように私には感じられた。和田先生もやはり「物語好き」少女だったのであるまいか。そして、物語好きの少女が長じて日記文学作家になったように、ご自身は長じて日記文学研究者になったと

ということなのだろうと、講堂の片隅で私はひとりごちた。『更級日記』は、今日概念でいえば自叙伝に近いものであり、しかも、綿密な構成意識に貫かれた物語文学だという、研究成果の一端の表現でもある。「やっぱり私は物語が好き」を生き生きと語る和田先生は、自分の生涯を物語にしつらえた孝標女の気持ちを代弁し、あるいは孝標女を演じているように見えたが、そうではなく、実は、一千年の時空を超えて孝標女が和田先生に憑依して自らの思いの丈を語っていた。そうであったに違いない。そう私は確信している。

そして、二〇二〇年夏、すでに退職されていた先生から新著のご惠贈にあずかった。日記文学研究の第一人者、福家俊幸先生（早稲田大学）との共編著『更級日記 上洛の記千年——東国からの視座』（武蔵野書院、二〇二〇年）である。多角的な研究論文の他に、所縁の地、市原市の関係者の寄稿もあり、さらに、日本画家、太田聴雨の《更級日記》をあしらった絵葉書に加えて、発掘調査や区画整理等を経て「更級」を冠する町や通りを設けた市原市の「区画整理前原形測量図」のDVD付という、豪華な書物である。四百ページを越す大著にして多彩で中身も濃くずしりと重い——八百四十二グラムもある。それでも、ここに紹介した和田先生の三冊の著書の中では最軽量ののだが——この本の副題、すなわち「東国からの視座」が文学研究と歴史研究の融合という和田先生の研究を雄弁に語っている。「あづま路の道の果てよりも、猶奥つかた」から始まった和田先生の『更級日記』研究は、宮廷文学をはぐくんだ頼通の〈文化世界〉の探求を経て、「あづま路の道の果て……」の地に辿り着いた。研究の長い旅路は大きく円環し、大団円を迎えた。

思い出すままにとりとめもなく記してきたが、こうしてみると、私が和田先生にまったく一方的にお世話になってきたということがよくわかる。加えて、しばしば先生からお菓子——もちろんたいはいは和菓子——をいただいた。和田先生に相応しくいずれも上品な味わいのもので、「更級日記の先生のお土産」として、わが家ではいつも好評であった。

お菓子といえ、忘れられないことがもうひとつある。和田先生の本学における活動の掉尾を飾った「退職記念座談会」である。最終講義にかえて行われたこの会にも、先生から参加者にお菓子——東京日本橋の「江戸富士七景」と京都の「京サブレ」——が振る舞われた。中世和歌文学研究者の故・岩佐美代子氏の思い出や、洪沢栄一との関係、さらには本学図書館特別文庫「祭魚洞文庫」とそこに所蔵されている貴重な『百人一首』に関するお話など、本学と縁の深いお話を他学部の教員や教育学習支援センターの所員らも交えて伺いながら、お菓子をいただいた。

あれやこれやとりとめもなく書き連ねているうちに、和田先生が退職された寂しさが——決してお菓子のことではなく——募ってくるのを禁じ得ない。先生が本学を去る前に何のお返しもできなかった——決してお菓子のことではなく——ことが、ただただ心残りである。